

平成30年8月21日(火)

夏休みの最後

もう夏休みが終わる。あつというまに新学期である。昔からこの悲しさは変わらない。あと1週間せめて3日夏休みが長くないかと真剣に祈ったものである。生徒諸君も同じだろう。

でもね、長くなったとしても、やはり夏休みは終わるのであり、早く終わるか遅く終わるかそんなに違いはないのだよ。

大学を卒業する日に、同級生と一緒に最後の晚餐として、卒業式の後に行きつけのスナックでお酒を飲んでいて。午後8:00発の特急「ひたち」でいわきに帰ることになっていたの、もはや返っては来ない過ぎ去った4年の月日に絶望感の中、ちびりちびりと赤ワインか何かを飲んでいて。

トイレに入ると、新しい書き込みが正面の壁にあった。

「大学時代は人生の夏休みだった。もはや戻らないこの日々よ。」

本当に涙が流れた。上野まで送ってもらったが、さよならも言えなかった。

車窓に映る町並みが途切れ、暗闇の向こうに東京が遠くなっていくのを見ると、とても寂しかった。

やがて、勿来の向こうに火力発電所の灯火が点滅するのを見たとき、戻れない自分がいることを実感した。

青春は確実に過ぎ去ったのだった。

でもね、青春が過ぎると、20代がやってきて、30代が続くと40代がやってくる。それでも終わらず50代が訪れた。60代がやってきて70代が続くだろう。80代90代に行く可能性も高く、100年生きることもないわけではない。

「100年待っていて下さい。」と言ったのは、夏目漱石「夢十夜」の一節。

「百年待っていて下さい」と思い切った声で云った。

「百年、私の墓のそばに坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」

自分はただ待っていると答えた。すると、黒いひとみのなかにあざやかに見えた自分の姿が、ぼうっとくずれて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の眼がぱちりと閉じた。長いまつげの間から涙が頬へ垂れた。

私には、百年生きる実感はないが、今を生きる実感は至る所にある。毎朝、八幡様に祈りをお願いすることは山とある。

「今日も磐城高校生が安心安全に生活し、実りある今を生きることが出来ますように。」